

二男がもたらしてくれた 真の幸せ。

新潟教会 菊池祥予さん

菊池祥予さんが40歳の時に授かった4人目の子ども(二男)は、心臓に疾患があり、さらにダウン症と診断された。ショックと不安で混乱する菊池さん夫婦は、頼みにする人から、「人を「公平」に観られるように、仏さまから授かったのですよ」と諭される。障害者という言葉に、自分とは縁のない暗いイメージを持っていた菊池さんの胸に「公平」という言葉が強く響いた。奇しくも出産前に立ち上げていた医療・福祉の情報交換をするサークルのなかで、悩みを分かち合い、多くの学びと勇気を得て、気持ちは前向きになっていった。二男は入退院を繰り返しながらも成長し、小学三年生に。振り返れば、家族全員が「二男のため」と行動したことで、人さまの役に立てることの喜びと生きがいを感じられるようになっていた。苦と思っていた二男の障害は、実はたくさんの方の幸せを家族にもたらしてくれる宝物だったのだった。



いまをともに生きる

法華経の「薬王菩薩本事品」は、仏の教えを身をもって実践することの大切さと、その姿が多くのの人に「阿耨多羅三藐三菩提の心」を発さしめることを示しています。平たくいえば、「まず人さま」と損得勘定を超えてわが身を使い、心と言葉を尽くして人を思いやるとき、その実践は自分の幸せや喜びとともに、みんなの救いにつながる光明こうみょうになるということです。

困っている人にとっては、具体的に手を差し伸べてくれる行為は何よりの救いになるはずですが、さらに、そのあたたかな思いやりを受けた喜びが、自他の命の尊さに目ざめる契機になる人もいますでしょう。一つの慈悲の実践が、人の心を真実に向かわせる手立てになるのです。そうした「慈悲の方便」こそ、積尊の願いに通じる布教伝道の原点なのかもしれません。コロナ禍かのいまは、ことのほかそうした慈悲心が求められているのです。

ただ、そのためには、できるだけ自身が慎ましく生きること、できるだけ少ないもので満足し、何ごとにも感謝するというシンプルな生き方を忘れてはならないと思います。そのうえで、いまをともに生きるすべての人の苦悩を思い、春風のように軽やかに慈悲の心を届けられる日を待ちたいと思うのです。